

第18回 ちゅうでん教育振興助成（平成30年度）

報告書資料 一般 - 50

学校名・団体名	浜松市立北浜小学校
コース	学校支援
活動・研究のテーマ	ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業・指導

〈活動・研究の意義および活動報告〉

1 活動・研究に至る経緯

本校には、特別支援学級4学級（知的2、自閉症・情緒2）、言語通級指導教室4教室（児童2、幼児2）が設置されている。また、通常学級にも発達障害等の特別な支援を必要とする児童が複数おり、そうした児童を理解したり合理的配慮について学んだりする機会を設けている。さらに、外国人児童（主にフィリピン・ブラジル）が各学級に1～2名在籍している。決して大人数ではないが、日本語の力は様々で、外国人児童就学サポーターや日本語指導のNPO職員が、取り出し指導や入り込み指導で学習を支援している。ただし、週に1～3時間程度で十分とは言えない。

特別な支援を必要とする児童への有効な指導方法や支援のあり方について研究・開発が進み、数多くの実践が報告されている。また、通常の学級における発達障害をもつ児童への対応の実践を通して、結果的にそれが他の児童にも有効であるという知見が数多く見られる。こうした特別支援教育の視点を活かした授業づくりは、すべての児童にとって、より「分かる・できる」授業になるという指摘であり、いわゆる「授業のユニバーサルデザイン（UD）」と呼ばれるものである。

以上を踏まえ、本校は、日々の授業や特別支援学級や言語通級指導教室の指導、外国人児童への支援等をUDの視点から見直し、改善を図っていく。また、特別支援学級や言語通級指導教室の効果的な指導の成果を、通常の学級の授業や指導にも活かしていく。

2 活動・研究内容と時期

(1) UDの視点を取り入れた授業改善、指導・支援

① 授業研究（年間）

本校は「自ら考え、学び合う子供の育成」を主題に、校内研修を推進している。特に「主体的・対話的で深い学び」になるように課題のあり方や話し合いのもち方を、授業を通して研修を深めた。さらに、授業のUD化を図る視点として「視覚化・共有化・焦点化」することを共通理解し、授業づくりに努めた。全学級に配備されている教材提示装置の活用はUD化の一歩であると、効果的な活用を呼び掛けた。



図1 教材提示装置の活用

さらに、特別支援学級の授業を全教員で参観し、UD化を目指しての工夫や合理的配慮について研修を深めた。また、言語通級指導教室の指導やグループ活動を参観する機会を設け、個に応じた指導・支援について理解を深めた。

② 支援を必要とする子供を理解するプチ研修（年間）

毎月、校内の児童について共通理解を図るために、子供理解委員会を開催している。毎回、その終わりの10～15分を使って、発達支援コーディネーターがプチ研修会を行う。その内容は、発達障害等の特別な支援を必要とする児童の特性の理解や配慮、事例検討等である。短い時間ではあるが、教員にとって大変よい学びの場である。

③ 研修会への参加（8～2月）

授業のUD化を進めたり、特別な支援を必要とする児童への指導・支援の質を高めたりするには、教員の力量の向上が欠かせない。そこで今年度、行政主催の悉皆研修とは別に、複数の教員が様々な

研修会（ほとんどが週休日）に参加した。その主なテーマは、授業 UD、授業 UD を支える学級経営、特別な支援が必要な子供への合理的配慮、読み・書きにつまずきのある子供への具体的な支援、発音の誤りを改善するための支援・指導、言葉の育ちに課題がある子供への対応等である。

研修会后、学びの成果を口頭で伝達したり、研修会の資料の参考になる部分に付箋を貼って回覧したりして、校内で共有することに努めた。

(2) 特別支援学級における ICT の活用

① タブレット PC の活用（9～3月）

今年度から2年間、タブレット PC の活用検証校（浜松市教委）となり、特別支援学級での効果的な活用を検証している。

右は、国語科の物語文の音読練習をした実践事例である。「CoNETS」でデジタル教科書を読ませ、「模範の音読を聴き、それを参考にしながら、登場人物の心情や場面の様子が伝わるように音読する」ことが目的である。

また、読書の時間、読むことに困難のある児童には、「リーダー」を使っているいろいろな読み物に親しませた。本アプリは、ふりがな、分かち表示、文字サイズの変更、読みの速さの調整ができ、読むことにつまずきがある児童を支援してくれた。

さらに、タブレット PC 導入に伴い、ステレオイヤークラスターやヘッドホンを複数準備した。周りの音に過敏に反応する自閉症・情緒学級の児童の中には、進んで活用する子もいた。

② 先進校の視察（9～11月）

学習の中でどのようにタブレット PC を活用すると、それが児童の効果的な支援につながるかを学ぶために、特別支援学級の教員が先進校の視察に出かけた。視察後、活用の具体的な方法を他の担任に伝達し、それに伴ってタブレット PC の活用が広がった。また、学習の場面に導入業者の ICT 支援スタッフを招いて、タブレット PC の活用が円滑に進むように支援してもらうこともあった。

タブレットPCを活用した話し合い活動の充実

小学校5年 国語・情緒学級 「大造じいさんとカン」 発達学級における言語練習での活用

本日の目的	・模範の音読を聴きながら、音読をすることで、心情や場面の様子の様子が伝わるように音読することができる。
タブレットを活用するねらい	・教師の代わりに、デジタル教科書を使って、模範の音読を流す。 ・3、6年生は教師の指導を受けながら、学習を進める。
使用したソフトウェア	・国語科デジタル教科書(光村図書 5年版)

授業の流れ



	学習場面の概要・児童の流れ	写真・資料等
導入	1 初めての確認をする。 もはんの音読を聞きながら、大造じいさんの気持ちが伝わるように工夫して本を読もう。	 タブレットの音声を聞きながら3人で音読の練習
展開	2 デジタル教科書の音読の音声に合わせて、3人で本読みの練習をする。必要性に応じて、音声を止めて、繰り返し音読の練習をする。	
展開	3 どんなふうに読めばいいか、確認する。 ・読む速さ、声の大きさ、声の高さを工夫させる。	
展開	4 特に練習したいところを、各自デジタル教科書の音声を聞きながら練習する。	
展開	5 練習の成果を3年生や6年生、教師に聞いてもらう。	
まとめ	6 大造じいさんのどんな気持ちをどのように読んで表したか、発表する。 低い声で、ゆっくり読むことで、大造じいさんの悔しがる気持ちを表した。	
児童・生徒の表情（感想・成果等）		 タブレットを使って一人で音読の練習
<ul style="list-style-type: none"> ・上手な音読を聞きながら、音読の練習ができるので、楽しく学習ができました。 ・イヤホンをしたので、周りの音が気になりませんでした。 		

図2 音読練習の実践事例

(3) 外国人児童への支援の充実

① 環境整備（9～1月）

日本語指導の NPO 職員とポルトガル語やタガログ語が話せる外国人児童就学サポーターが、取り出し指導や入り込み指導で、外国人児童を支援している。

今年度、取り出し指導をする教室に、あいうえお表、ふりがな付きかけ算九九表、百珠そろばん、多種の学習カード等を整備し、効果的な指導・支援に役立てた。

② 学習支援ボランティア（11～3月）

日本語指導の NPO 職員や外国人児童就学サポーターの他に、学習支援ボランティアを要請した。ボランティアは、NPO 職員と連携して児童の学習支援にあたった。

今後、ますます外国人児童が増えていくことが予想されるので、浜松市外国人学習支援センターの日本語ボランティア養成講座の受講者の協力をいただきながら、ボランティアの組織づくりをしていきたいと考えている。



図3 取り出し指導



図4 入り込み指導

3 活動・研究の成果

本校には、特別支援学級や言語通級指導教室があること、さらに、通常の学級にも、外国人児童や発達障害等の特別な支援を必要としている児童が複数いる。今年度、教職員がこれを本校の強みと捉え、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業や指導・支援にあたったことは大きな成果である。

その成果が目に見えて子供たちの姿に現れているとはまだ言えないが、来年度も本テーマでの研究を継続していきたいと考えている。